

アメリカのバイデン大統領は政権発足後に、新型コロナウイルスで痛んだアメリカ経済を本格的に回復させるために大きなインフラ投資を行うと宣言している。今までの膨大な国債発行により、アメリカは三兆ドル以上の財政赤字となつているにもかかわらずなのである。

バイデン大統領は、大きな経済成長がなければ税収は増加していかないことをよく理解している。新型コロナウイルス対策だけでは経済は成長しない。経済成長がなければ国民の豊かさも何も生まれない。これは、一九三〇年代の世界恐慌時代から学んだ教訓でもある。

この時の世界恐慌からの回復については、ニューディール政策の役割も大きかったが、最大の貢献は第二次世界大戦という「異常なほどの需要の創出」によるところが大きかった。

現代では、戦争による需要の創出を考えることは出来ないため、ニューディール政策以上の需要喚起策が必要で、それは将来の人びとへの贈り物となるインフラ整備以上

死)を何度もしてきたことを意味している。城壁がないために、受け入れざるを得ない膨大な死を繰り返し経験したのである。

都市城壁の発明は「公共」の発見であり、「みんなで建設してみんなで維持する構造物(＝インフラ)」の重要性の認識の獲得でもあった。ヨーロッパではたびたび悲惨な戦争が起こったから、この都市城壁というインフラ(＝公共物)は都市建設の前提となってきたのだ。

パリの歴史

ヨーロッパを代表する都市・パリの歴史を振り返って、都市城壁インフラの重みを見てみたい。パリのシテ島にケルト人が住み始めたのは、紀元前三世紀頃と言われているが、島を取り囲む城壁を築いたのが紀元前二世紀の初め頃だった。

三世紀にはアラマン人の攻勢を受けてシテ島の城壁を強化した。その結果、四七〇年のフランク族のパリ攻囲に耐えたものの、フランク王国に占領された。八八五年ノルマン

都市城壁の重さ・パリの歴史

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

の正解はないだろうと考える。だからこそ、バイデン大統領は早くから「インフラ投資」を述べているのだ。ところが、この二五五年間、世界の先進諸国の中で唯一インフラ整備への投資量を大幅に削減してきた日本では、この世界の常識である当たり前の話を通じないのである。

インフラストラクチャー

われわれ建設人がよく用いるインフラストラクチャーという言葉は、「社会を下から支える基礎構造」を意味し、アダム・スミスが述べているように「利潤動機では提供されないか、きわめて偏ってしか提供されない財やサービス」である。

したがって、インフラ整備は公的な機関により「現在と将来の国民のために、受益者が偏らないように国民全般に普遍的に提供される」という性格を持つ。ところが日本では、鉄道、道路、上下水道など、これだけのインフラに囲まれて生活や生産・消費が成り立っているのに、その拡充や充実への理解がさっぱり深

まらない。それは何故なのか。

インフラストラクチャーは、「下の方の」を意味するインフラと「構造」を意味するストラクチャーとから成る合成語であり、一〇〇年ほどの歴史があるとされる。ストラクチャーはラテン語にもあるほどの古い言葉だが、これにインフラが接頭語としてくっついたのはフランスの軍に関する用語となつてからだとされている。

インフラストラクチャーが社会を構成する上で不可欠の前提だと考えられるようになった理由は、ユーラシアやヨーロッパの歴史を見ると簡単に理解できる。ヨーロッパ文明は、直接的にはメソポタミア文明の系譜にあるが、ここにシュメール人が都市国家を建設したのは、いまから五、五〇〇年ほど前のことだった。驚いたことに、シュメール人はこの時代からすでに都市全体を強固な城壁で囲み、外敵からの侵入に備えていたのだ。ということは、莫大な費用と労働力を必要とする都市城壁の建設にシュメール人を向かわせた「悲惨な経験(愛する者の

人の襲撃があつたが、シテ島は強化された城壁のおかげで攻撃に耐えたのだ。

フィリップ・オーギュストは街の整備を進めるとともに城壁を建設し、それは「フィリップ・オーギュストの城壁」と言われている。百年戦争の後、シャルル五世の城壁が拡張整備され、ループルが城壁内部に取り込まれた。

一六六〇年のイギリスによるパリ占領を経て、シャルル九世はセーヌ右岸に城壁を建設。それは、「シャルル九世とルイ一三世の城壁」と呼ばれている。一六七〇年に太陽王ルイ一四世が城壁をすべて撤去させた後、一七八四年からは徴税請負人の城壁(城壁がパリに入るための関所となつたために、こう言われる)が建設された。その後、フランス革命、ナポレオン時代を経て、一八四一年からパリ最後の城壁となる「ティエールの城壁」が造られた。

この城壁は、延長三四キロ、幅四〇〇メートルという広大な空間の中に堤防状の土塁があるという構造だったが、一九一九年に終結した第一

次世界大戦で航空機による空からの攻撃時代を経験すると、無用の長物と化し、大戦終了後に撤去された。ここに、パリの都市城壁の時代は終わりを告げたのであった。

このように、ヨーロッパの都市の歴史は都市を囲む城壁建設の歴史でもあった。彼らの歴史はインフラストラクチャーを繰り返し整備して命を守ってきた歴史なのである。城壁インフラが存在しなければ、都市に大勢の人間が集まって暮らすことなどおおよそ不可能であった。ということは、パリという街が生み出してきた芸術、芸能、科学、技術なども城壁の産物と言えるのである。

この事情は、パリ以外のヨーロッパの都市についても言えることで、例えばウィーンも数々の音楽家を育んできたが、それもウィーンの都市城壁がもたらしたものである。この経験がわれわれ日本人には皆無なのだ。中国を含む世界のなかで日本人だけが社会の基礎構造としてのインフラの絶対的な重要性を理解できないのは、ここから来ているのである。

Kagen

Jouyo

下言上用